

凡 例

- 1 积文はすべて横書き1行に書きあらため、行かえは/をもって示した。重ね書きも行かえと同じあつかいとした。ただし、内外両面に墨書のあるものは2行にわけて記した。
- 2 翻字にあたっては、原則として通用の常用漢字をもってした。ただし、廣・藝・廳・などは本字を用いた。
- 3 积文は調査次数の順に、遺構ごとにまとめて掲載した。同一遺構の発掘次数が数年にわたるものは次数ごとにわけて掲載した。
- 4 まず調査次数をかかげ、遺構ごとにまとめて积文をかかげた。积文の次行には土器の種類、器種、記載位置および備考を注記した。
- 5 残画があるものの、积読不能のものは□で示し、残画から文字が推定できるものは〔 〕を用いて□の上に記した。
- 6 異筆がある場合は「 」、異筆が数種あるものは「 」(1), 「 」(2)として記した。
- 7 多数の文字が習書、楽書されている場合には、文字の種類のみをかかげ、同一文字については注記のみとし省略したことがある。
- 8 土器の器種については「平城宮発掘調査報告Ⅶ」(『奈良国立文化財研究所学報26』1975年)を参照されたい。
- 9 すでに報告済みの墨書土器の末尾に記した『学報』番号の、平城宮発掘調査報告との対照は以下のとおりである。
『学報15』 「平城宮発掘調査報告Ⅱ」
『学報17』 「平城宮発掘調査報告Ⅳ」
『学報26』 「平城宮発掘調査報告Ⅶ」
『学報34』 「平城宮発掘調査報告Ⅸ」
- 10 「积文」第32次中、S D4951を宮の南辺外堀S D1200との合流点を境にして、便宜上上流をS D4951-1、下流をS D4951-2に分けた。